

愛光学園同窓会の皆様

愛光学園32期卒業生 ジャズハーピスト 古佐小基史

32期卒業生、古佐小基史（こさこもとし）です。愛光学園より東京大学理科Ⅱ類に進学、医学部保健学科で看護師と保健師の資格を取得し、卒業後1年間東京大学医学部附属病院精神神経科に勤務、1997年に渡米し、独学でハープ演奏を学び、現在はアメリカ合衆国カリフォルニア州に在住、ハープ演奏家、作曲家、即興演奏家として活動しております。2008年より日本でも演奏・講演活動を開始し、母校と同窓会での演奏・講演、母校の60周年記念祝賀会での演奏の機会もいただきました。

カリフォルニアの片田舎に暮らし、真摯に音楽芸術の探求を続けるためには、それほど多くのものを必要としておりませんが、その探求で得た音楽を広く社会に還元するには、各地に赴くための旅費、そこでの滞在費用、宣伝費用、それに楽器の調達と運搬の費用など、多くの経費がかかります。地元カリフォルニアでの活動では、自分の楽器を車で運んで演奏活動をすることで経費を最小限に抑えることができますが、日本での公演では、これらの経費、特にハープという普及率の低い楽器の特性として、楽器の調達／運搬費用が足かせとなり、多くの皆さんにハープの音色を気軽に楽しんでもらうようなイベントを組むことが難しい状況にあります。

これまでは、松山在住のアマチュアハーピストの方のご厚意で、その方にレッスンや楽器のメンテナンスなどの実務を提供することで現金を介することなくフランス製の高品質なハープをお借りすることができておりました。そのお陰を持ちまして、故郷松山と関西エリアでは、通常のコンサートに加え、幼稚園から大学まで母校を含む様々な教育機関、教育、医学、環境などに関わる活動をしている各種文化団体などのイベントで音楽と講演を提供させて頂くことが出来ました。

しかし、前回の日本公演の折りに、そのハープの持ち主の方が来年以降楽器を売却のご意向をもっていただくと伝えられました。これまでのご縁で、本来の値段よりもかなり安価で譲っていただけたオファーを頂きましたが、現在の自分の経済力では楽器の購入は無理と判断し、今後は日本での活動を縮小することもやむを得ないと覚悟を決めていたところに、愛光学園同窓会の先輩方と同級生から、愛光学園の同窓生で基金を設立し、同窓会としてハープを購入したらどうかというご提案を頂きました。

幸運なことに、時期を同じくして、音楽療法の研究を通じて交流のある方から、関東でハーブ運搬に必要な車両を必要に応じて提供して下さるというオファーも頂きました。車両と楽器、それにこの身一つあれば、これまで松山を中心に行ってきた多様な活動を継続することができるだけでなく、そのような活動を全国的にも展開し、これまでハーブに接したことのない方達にも、ハーブ音楽を通じて幾ばくかの喜びをお届けできる可能性が広がって参ります。

母校の同窓生の皆様にハーブ購入基金の設立をお願いするにあたり、自分の活動がそ
のご厚意を受けるに値するものかどうか、自分自身に問いたすなかで、「われらの信
条」に謳われた「世界的教養人」という視点から自分の芸術家としての立ち位置を明ら
かにし、それを皆様にお伝えすることが大切であると認識いたしました。

少し長くなりますが、以下に自分の芸術家としての理念と決意をしたため、ご挨拶と
させていただきます。

「我らの信条」より；
われらは、
世界的教養人としての深い知性と、高い特性を磨かんとする学徒の集まりである。
学問に対する情熱と、道義に対する渴望とは、われらの生命である。
幾千年にわたる人類苦心の業績、
この高貴なるものに寄せる愛情と尊敬、
これを学びとるための勤勉と誠実、
これを伝えこれに寄与するための忍耐と勇氣とは、われら学徒の本分である。
かくて高貴たる普遍的教養を体得して、世界に愛と光を増し加えんこと、
これが我らの願いである。
輝く知性と曇りなき愛、愛と光の使途たらんこと。
これが我らの信条である。

愛光学園在学中には、「われらの信条」に謳われた学徒としての本分を十分に体得す
ることはかなわず、42歳を過ぎた現在も、学徒として学びの途にあります。体系化さ
れた学問を学ばば学ぶほど、「高貴なる普遍的教養」とは、言うなれば体系化できない
個人としての全人間的な人生体験の総体から浮き出してくる宇宙観のようなものと

感じるようになり、そのあくなき探求こそは、まさに生きている意義であり「われらの生命」であると実感できるようになりました。

「我らの信条」に謳われた愛光学園の理念は、深い知性と高い徳性を備えた普遍的教養を体得した世界的教養人として、世界に愛と光を増し加える働きをする使途、言い換えると「高い理性に立脚する文化的な人間社会の守護者／指導者」を育成することにあると理解しております。

国の守護者／指導者を育成する過程で、彼らが日常接する文学、音楽、建築物、その他様々な制作物の影響について、プラトンの「国家」の中に興味深い論説があります。そこでは、優れた守護者を育成するために、彼らに語り聴かせるのにふさわしい詩とはどのようなものであるべきかを考察したのちに、そこで見出された基準を他のすべての造形物にも当てはめるべきかどうかという議論が展開します。以下にその一部を引用いたします。

『それでは我々は、ただ詩人達だけを監督して、優れた品性の似姿を作品の中に作り込むようにさせて、さもなければ、我々のところ詩を作ることを許さずにおけば良いのだろうか。それともむしろ、他の様々な職人達にも同じように監督して、問題の悪しき品性や放埒さや下賤さやみぐるしさを、生き物の似姿のうちにも、建築物のうちにも、そのほかどのような制作物のうちにも作りこまないように禁止し、それを守ることの出来ない者は、我々のところでそうした制作の仕事をするのを許さないようにすべきだろうか、一ほかでもない、我々の国の守護者達が、ちょうど悪い毒を持った牧草地の中で育てられるように、悪しきものの似像の中で育てられ、そうした多くのものから少しずつ摘み取っては食べているうちに、積もり積もって知らぬ間に悪の堆積を、自分自身の魂の中につくり上げることのないようにね。いや、若者達が言わば健康な土地に住むように、あらゆる者から身の為になるものを摂取して、いたるところから、あたかもそよ風が健全な土地から健康を運んでくるように、美しい作品からの影響が彼らの資格や聴覚にやってきて働きかけ、知らず知らずのうちに、美しい言葉に相似た人間、美しい言葉を愛好しそれと調和するような人間へと導いて行く為だね』(岩波文庫、国家(上)

p.217~218)

ここで述べられているような表現の自由に対する規制を、現代の民主主義国家で行うことは不可能ですし、適切ではないかもしれませんが、「守護者を育成する上で彼らに

触れさせるにふさわしい作品の基準」として語られていることは、表現の自由という特権を与えられた文学、音楽、美術、建築やその他様々な創造に関わる現代の制作者が、その仕事に携わる者の道義として心に留めておくべきことであると持戒しております。

もし、制作者として「我らの信条」に謳われている「高貴なる普遍的教養」を真剣に探求しているならば、その制作者によって生み出される作品には、接するものに普遍的教養への情熱と渴望を目覚めさせ、自らをより深い知性と高い徳性へと向かわせる意欲を呼び起こす力が宿ることでしょう。

しかし、現状で目にする様々な造形作品は、「普遍性」とは真逆の性質を備えた「流行とともに移ろいゆく目新しさと刺激」に満ちた一時的な快樂として世の中に氾濫し、日々の経済活動や娯楽産業、メディアなどにより、好む好まざるに関わらず老若男女の魂に影響を及ぼしています。

その創作活動が経済活動に全面的に支配されるポップ歌手やアイドル歌手までもが「アーティスト」という呼称で呼ばれ、音楽の制作や流通に関わる業者のほとんどが、「世界に愛と光を加える」という目的での文化発信ではなく、音楽という商品を取引することで経済的利潤を得ることを目標に動いている時代において、「高貴なる普遍的教養としての音楽」とそれを生み出せる音楽家としてのあり方を追求することは、名利と経済的成功には結びつかない挑戦であり、そこでは「これを伝えこれに寄与するための忍耐と勇気」が試されています。

32期生として母校に在学中には、生徒一人一人の多様な価値観を認める自由な校風が感じられました。しかし、その一方で、学校全体に「芸術や体育にいそしむことと、受験に必要な学科を修めることを両立させることは難しいので、大学入学という直近の目標を達成するためには後者を優先させ、必要とあらば前者は犠牲にするべきである」というような空気があることも感じておりました。このような空気は、世界的教養人を目指す「われらの信条」の理想とは矛盾すると感じられるものではありませんでしたが、現実的には、父母や学生自身にとっては「普遍的教養」というような抽象的なものの体得よりも、とりあえずは志望の大学に入ることの方が重要であったし、学校としても私学の進学校としては受験での実績を出すことが学校運営においても大切であるという事情があったことは、十分に理解できます。

しかし、あえて理想を語るならば「普遍的教養を体得した世界的教養人」は、レオナルド・ダ・ビンチやヨハン・ゲーテなどの万能と賞された偉人達がその業績で後世に示したような、この世に存在する様々な事象への飽くなき興味とそれを果敢に知ろうとする情熱なくしてはあり得ません。そして、その興味と情熱の対象は、自然科学、文学、思想哲学、様々な造形芸術、体育活動などの様々な活動に自由に闊達に接することのできる環境の中で、学生一人一人が自分自身で見出してゆくものだと思います。実際、自分の音楽への興味と情熱は、愛光学園在学時に見出されたものでありました。

受験準備という非常に具体的でシビアなタスクに取り組む教育現場では、「われらの信条」の理念を十分に反映することが困難であるかもしれませんが、そのタスクからは自由な立場にある卒業生として、講演や演奏会を通じて在校生と交流することで、子供達自身が自らの興味と情熱の対象を見出すきっかけとなり得るような機会を提供し、学園の現役スタッフの皆様、在校生、卒業生が一体となって取り組む「われらの信条」の理想に近づく努力に微力ながら参加させて頂きたく思っております。

「われらが信条」への実践的アプローチとして、在学当時の校長、門屋法典先生は、文武両道の大切さを熱心に説いて下さいました。中学、高校と柔道部で活動しながらも、どうにか東京大学にも合格することができた私に、ご本人自身が優れた柔道家であった門屋先生が「君が東大に入れたのは、柔道をやっていたお陰だ」とねぎらって下さったことはよく覚えております。文武の「文」には文芸、つまり受験で試される学科に加え芸術や思想、哲学も含まれています。「武」には克己の力を養う訓練、自分自身の身体と精神をコントロールする訓練などが含まれています。現在携わっている音楽の仕事では、自然科学の知識、文学から智恵を学び取る力、論理的思考能力、美を感じ取る感性、身体をコントロールして楽器を操る力など、人間に与えられた能力をバランス良く使うことが要求されています。これらの能力の多くは、門屋先生からご教示頂いた文武両道の実践から得たものであります。

日本古来の文武両道の理念と「われらの信条」に集約される世界的教養人を目指す理念の上に培った音楽家としての知識と能力を、虚栄心や功名心からではなく、純粹に世界に愛と光を増し加えるという目的意識のもとに多くの方と共有できるよう、今後とも活動を続ける決意を固めております。

皆様のご厚意で日本に準備して頂く楽器を演奏するたびに、「われらの信条」の理念とこの決意が強く呼び起こされ、自分自身とその音楽に接する皆様をより高い精神性へと導いてくれることでしょう。

皆様の暖かいご厚意に、心より感謝いたします。